

木島英登さん

僕にとって人生で一番大切なのは挑戦すること



文/末藤浩一郎 写真/平岡 純

小さい頃から「世界中を旅してまわることが夢」だった青年が、高校3年生の時、ラグビー部の練習中に下敷きとなり脊髄を損傷した。ショックだったのは自分が一生歩くことのできない体になったことではなく、周囲の人々の態度の変化だったという。そして青年は車いす生活になっても自分を変えない決意をした。そして、世界への旅が始まった。

旅に出ると自分という個が見えてくる

最初の旅は大学1年生の夏。アメリカのサンフランシスコでのホームステイに始まる。「語学学校に通ったんですが、あの授業の終わりに先生が『土曜日

にハイキングに行きたい人?』と手を挙げさせたんです。僕が『車いすでも行けますか?』と尋ねると『あなたはハイキングに行きたいの? 行きたくないの? どっち?』と意思確認してきたんです。もちろん『行きたい』と答えると『だったら行こうよ』と言ってく

れたんです」

ハイキングに行くと車いすを嫌な顔ひとつせず、代わる代わる担いでくれる語学学校の仲間たちがいた。木島さんは「バリアフリーのその先にあるもの」をアメリカで肌で感じたという。「日本のバリアフリーは設備では



profile

きじみひでと／1973年大阪生まれ。高校時代、ラグビー部の練習中に第11胸椎脱臼骨折。脊髄を損傷。大学時代のアメリカホームステイをきっかけに現在まで43カ国を訪問。大手広告代理店勤務。現在、会社を1年間休職し、ダスキン障害者リーダー海外派遣事業を利用してアメリカ・カリフォルニア大学パークレー校に留学中。大学での障害をもつ人のサポート体制とその組織の米国最新事例を研究、成果を日本にも持ち帰る予定。著書に『空飛ぶ車イス』(IMS出版)。



メンバー間のやりとりには手話が使われ、声がないので一見静か。3月の新作「泣き虫桃太郎」は台本はできたが、演出はこれからだ。メンバー間のやりとりには手話が使われ、声がないので一見静か。3月の新作「泣き虫桃太郎」は台本はできたが、演出はこれからだ。



世界的にみても悪くはないです。でも心がないんですよ。あまりにも設備にだけ注目されすぎですね。アメリカでは『できる』か『できない』ではなく『やる』のか『やらないか』なんです」

「よく『アジアの旅はバリアフリーが整ってなくて大変でしょう』と言われるんですが、僕にすれば物価が安いアジアは旅しやすい。いいホテルに泊まることができるし、バリアフリーでなければ介助人を雇ったり、タクシーをバンバン利用できる。トイレの設備がないなら日本から持っていくばいい」

木島さんの旅はガイドブックには決して書かれていない旅のやり方だ。アフリカのジブチに海外青年協力隊として派遣されている友人を、うまくアポイントがとれないのも関わらず、ひとりで行

いにいたり、マカオのディスコで現地の女の子たちと踊りはしゃいだり、チュニジアで見知らぬ男について行って盗難にあったりエピソード満載だ。

各国のバリアフリーの状況は、経済や宗教、教育などと無縁ではない。しかし、木島さんが心を動かされるのは、それらを越えたところにある個人と個人のふれあいやぶつかり合いにあると読みとれる。「旅とは自分をリセットして、ありのままの自分、個を試す場だ」と木島さんは言う。

旅のスタイルはそのまま生き方にもつながっている。

大学進学をあきらめ 手に職を、と言われ…

木島さんは神戸大学出身だが車いすで入学した第1号だ。進学校に通っていた彼は、大学進学を希望していたが、入院先のリハビリテーションセンターのスタッフからは「障害者に差別のない公務員」か「手に職をつけるための専門学校」を勧められた。

「なんで、そんなこと言われなければあかんの？ というのが僕の印象なんです。まず、自分の意思が大事じゃないですか。大学選びにしても、本人が行きたい大学ではなく、まず障害があっても行ける大学を探す傾向があります

よね。思考の順序が逆だと思うんです」

木島さんが入学後、神戸大学には頸椎損傷の学生が続いて入学し後に続いた。

大学に限らない。木島さんは雑誌を見ておもしろいなラーメン屋があれば行く。入店を拒否されることもある。でも「車いすのお客さん初めてで嬉しいわ」と言われたことが何回かあるという。

就職活動は1勝28敗。その1勝がなければ木島さんは100敗でも200敗でもしたかも。世の中を変えていくということは、多分、こういうことなのだろう。

木島さんは、現在もその1勝を果たした大手広告代理店で働くサラリーマンでもある。

有給休暇はすべて旅行に費やし、帰国した空港から会社に直行することもあったという。

夢は、日本の障害をもつ人が 自由に学べる環境整備

2000年3月に開設した「トラベル・フォー・オール」という、旅の情報とエピソードなどを綴ったホームページが話題を呼び、著書『空飛ぶ車イス』の出版につながった。講演やインタビューの依頼が増え木島さん本人にも注目が集まる中、会社を退職し、タスキン障害者リーダー海外派遣事業を

利用して2003年の8月までアメリカのカリフォルニア大学バークレー校に留学中だ。

「次に自分にできることは何かを考えたときに、世界各地のバリアフリーの状況を見て来た者として日本の状況を変えていきたいと思っただけです。日本で、いま最も欠けているのが教育面でしょう。障害の有無に関わらず勉強したい人が高等教育に自由に進める環境を整えるために、先進国であるアメリカのバークレー大学が、どのように障害者を受け入れているのか先進事例を研究しています」

日本では、実に国立大学の約半数が障害をもつ人の受け入れの実績がない。受け入れている大学も支援体制が十分ではないという。アメリカでは専攻学問が自由に選択でき、障害をもつ学生の企業へ



メンバー間のやりとりには手話が使われ、声がない



メンバー間のやりとりには手話が使われ、声がないので一見静か。3月の新作



メンバー間のやりとりには手話が使われ、声がないので一見静か。3月の新作「泣き虫桃太郎」は台本はできたが、演出はこれからだ。



メンバー間のやりとりには手話が使われ、声がないので一見静か。3月の新作「泣き虫桃太郎」は台本はできたが、演出はこれからだ。

のインターン制度が充実しているなど就職支援が盛ん。アルミニウム度といって障害をもつ人に限らず、少数民族やゲイ、レズビアンなどマイノリティーが同じ境遇にいる卒業生に進路や就職を相談できるシステムもある。

**他人と同じ土俵では勝負せず
個を磨くことが大事**

木島さんのバイタリティーの原動力を聞いてみた。
「僕自身ががんばって来られた原動力は、実は女の子にモテたいか

らなんです。アホほどアタックしてますよ(笑)。行った外国の数よりアタックした女性の数の方が自信があります(笑)。僕、ケガした時、童貞やったんです。性の悩みって誰にでもあるじゃないですか。このまま女性を知らないで死んでいくなんて絶対に嫌だと思っただけ。モテるためには家に閉じこもっているだけでは誰も魅力を感じてくれないし、自分でお金を稼いで自立しなきゃだめですよ」

「人生に勝つ秘訣でもあると思う」
「僕にとつて人生で一番大切なのは挑戦すること」
木島さんの自分を変えない決意が、世の中を変えることにつながり、人々のこころを少しづつ変えていく。

**ウイ
な
人**

僕自身ががんばって
来られた原動力は、
実は女の子に
モテたいからなんですよ。



メンバー間のやりとりには手話が使われ、声がないので一見静か。3月の新作「泣き虫桃太郎」は台本はできたが、演出はこ

■INFORMATION
旅の情報を発信する木島さんのホームページ『Travel for All』
<http://www.tam.nada.kobe.jp/KIJI/>